過去から現代につなぐ 水車からくりのバトン

話し手 豊玉姫神社 宮司・水車からくり保存会事務局長
赤崎 千春（あかさき ちはる）さん（昭和25年7月28日生）
聞き手 鹿児島県立薩南工業高等学校 情報技術科 1年

知覧と水車

昔、知覧の士族は貧しく副業をしなければ生計がたてられなかったと言われています。木材が得られる山はあったので、大工や山師（林業従事者）をする人が多かったんですね。知覧はそういう場所だから、昔は、水車を作り、製材所や家畜の骨を砕き肥料にするために利用していたようですね。

他にも知覧の武家屋敷では、昔、男子が産まれると五月人形みたいに、節句に手回しのからくり人形を見せる風習があったと言われていますね。

水車からくりの歴史

豊玉姫神社の水車からくりの起源に関する明確な記録はないんです。神社前の水路が、1780年にできたことからこれ以降の江戸時代頃のものと考えられています。それから、明治から昭和にかけて度重なる戦争により途絶えたようです。でも、昭和43年に明治百年記念の事業で民俗調査というものがありまして、東京から民俗学の先生方が来られたんです。

神社の倉庫の片隅に置いてあった古い人形を見られて、「こんなのがあった。非常に貴重なものだ。使った痕跡がある。」など、からくりがどのようにして動いていたのだろうと、興味を持たれるようになったのが昭和52年のことでした。その後、人形の研究をされている方や人形師の方が来られて、歴史的な発見と言われたことを機に、昭和54年保存会の結成と町民の援助により復活することになったんです。

水車からくりの仕組み

豊玉姫神社の水車からくりに設計図はありません。作り手は、「ここをこうすれば」とか「人形の手を上げるには、この糸を引っ張って･･･」といったように試行錯誤をしながら作っています。

水車の回転を人形の動力に変える部品が歪輪（わいりん）という部品です。水車によって回転する歪輪は、シーソーのような往復運動する部品を動かし、その往復運動する部品と人形の動かしたい部分を糸でつなげば、人形が動きます。歪輪の形を変えることで、ゆっくり腕を上げ下げしたり、人形を回転させたりできるんです。人形の動きと歪輪の形状の関係性は図面に起こして作ってもなぜか動いてくれません。作り手が頭の中で考え、試行錯誤で作っているんですよ。人形に繊細な動きをさせるのに、糸を1cmや5㎜といった単位で微調整する必要があり、とても大変な作業です。だから披露する最後の一週間は微調整に明け暮れ、壊しては作りの連続でいろいろと大変なことばかりです。

制作メンバーは15人、皆さんボランティアです。皆、見に来てくれる方の御期待に応えたいという一念だけで制作しています。

六月灯の時期にする理由

周りからは、「知覧の観光資源として、一年中見学できるようにできないか」と言われるんですが、田んぼの水を使っているので、その時期が終わると水が来ないんですね。また、精密な仕組みですから管理も大変で。コンピュータを使えばできるんでしょうけど、私達のからくりは、素朴な水車で動くその素朴さがまたいいのかなという気がします。

水車からくりの人形劇を見た子供の中には、「どうやって動いているのだろう？」とずぅーと見ている子供もいます。後継者も不足しているので、一人でも多くの子供たちに興味を持ってもらって、水車からくりを維持していきたいですね。

穴を掘る花咲じいさん

聞き書きコラム

薩摩の水車からくり

水車からくりの水車は、農業用水路に設置されている。伝承によると、明治維新以前から存在し、六月燈の際に上演されていたと伝えられている。当時、田植え時期に神社で上演された水車からくりは、神様への五穀豊穣や健康などの祈願と、野良仕事で疲れた人々の癒しとなっていたと考えられている。

水車動力によるからくり人形は、全国でも薩摩半島南部の万之瀬川流域にのみに伝わる民俗芸能で、南さつま市の竹田神社でも例年7月23日に、神社前の用水路に水車を設置し水車からくりを上演している。